

# 山鳥先生の追想

山鳥先生の思い出

田中兼治

自分は山鳥先生に、一生の方向を決定していただいた恩のある先生だが、この文を読んでもういただけなのが何より悲しいわけである。師範入学と同時に師事し、三年迄は博物準備室へは勝手に入室研究を許され、現在の生物クラブである当時の博物会では放課後に特別指導をうけ、四年の時、明石女師へ御転任の時は後任の山田英一（現在伊賀上野に在住）先生にくわしく引継いでいただき、師範卒業の後は文検合格迄三年間かつと御鞭撻を乞い、その後は多可郡の山奥から神戸市野崎高小へ、2年後に県立加古川高女へ、更に八年後に神戸市立第二高女へと、かつと山鳥先生の御指示のままに転勤したものであつた。

昭和17年だつたか比叡山へ川村多実二博士指導で、野鳥の鳴声を聞く為登山、宿泊した時の如きは、先生の教え子の松本從之先生（姫路琴丘高校長）とその弟子の自分と頭をそろえて話し会つた時なんか一生忘れられぬ楽しい思い出の一時であつた。又昭和15年8月尾道市外の干潮村にある広島文理大臨海実験所での夏季講習の帰途車中でフト話が先生の2男君が旅順工大在学中赤痢で急死された時の事に及ぶと急に先生は愁歎した様にされたのにオヤオヤこんな話を出すのぢやなかつたと後悔した程であつた。君達同好の士とこなに研究や採集の旅行をしている時が、一番楽しいんだがなーと、しみじみ語られた事があつた。昭和のはじめ、牧野博士がまだまだお元気の頃、マヤ植物同好会を開かれ、度々あのマヤケーブルの頂上の会場へ牧野先生を招かれて講演会を開催され或は淡路では、雨

の中もかまわず採集会を牧野先生に願つたりした事等、脳裡を去らぬ事が多すぎて困る位にある。

前後まちまちとなるが、昭和4年神戸市の作井視学の発案で、神戸市附近の山野で遠足の生徒達を指導する為の植物分布図を作成する事となり、山鳥先生に指導を願つて陶久先生を委員長に、山崎先生や自分等十名の者が市役所より「神戸市附近の植物分布状況調査を命ずる」という辞令をもらつて毎週1回毎午後や日曜に東は六甲から西は鉄拐、鉢伏迄採集にまわつたのも山鳥先生と共にありし日の思い出である。

山鳥先生が最も将来を嘱望されていたと思う1年後輩に安井喜太郎君がいたが、才子多病のたとえの通り、県一高女の教頭時代に大成せずして遂に世を去るし、西宮高女で先生の膀腕の部下として先生を長年助けられた今西先生は京都府の郷里に御健在の由である。この御2人は先生を思い出す度に忘れられぬ御2人である。

山鳥先生と行動を共にした多くの写真は20年6月5日の空襲で大部分は焼いたが、先生還暦祝賀会の席に於ける、御師、明師卒業の同志一堂に会した時の御夫婦の写真と、御1人丈の大写し1枚とが先生を思い出すよすがとなる唯一の物である。

山鳥先生の事についてはあまりに多過ぎる。いずれ多くの人から色々と思ひ出話があると思つて、僕に関する極、一小部分のみを書いて追憶の記とする。

以上

# 山鳥先生の思い出

河原巖

私が山鳥先生に深く接するようになったのは、昭和7年頃同好者が集つて「博物趣味の会」を結成し、折々催した採集会に指導者になつてもらつたり、そごう百貨店などの定期的な展覧会に、昆虫の中林馮次氏と植物方面を山鳥先生にお願いして、審査員となつてもらつたりした頃からである。

その頃先生は西宮高女校長だつたので、学校や香榎園の御宅によく出かけた。当時大丸などでも博物知識や趣味の普及につとめられ、座談会や採集会を度々催されていたが、そんな時には必ず先生の姿に接して、いろいろとお話をうけたまわつたものである。

その頃であつたと思う「どうも日本人は花火線香式

のところがあつて、思つた当は初仲々熱心に駆廻るが、長続きがしない。このことは政治家、役人、指導者なども同様だ。第一次大戦後あれだけやかましく科学教育の振興を叫びながら、いつのまにか何もいわなくなつた。あの熱意で進んでいたなら、学校の理科指導も正しく行われ従つて充実したものになつて居り、日本人の科学水準はウント向上していた筈なのに惜しい。」と述懐されたり「未だに掛図などで授業している先生がある。しかもその掛図が間違つているのを知らない。これは理科学習は事実について観察実習するという根本精神を失つているから、絵と事実との相違が分からないからで、子供に正しい学び方を教え

ないばかりか、ワソの知識を授けていることになる。例えば等四サクラの掛図を見ると、花が高低になつている。実際のサクラの花は必ず花梗に長短があつて上部が揃つているものである。」とも話された。

昭和10年頃神戸市は先生を理科視学委員として、市内小学校の理科教育の改善に協力を乞ひ、学習指導の参観、批評研究会席上での批評や講話などを願つていた。こんなことも思い出される。私が「この頃の若い先生は、理科を研究しようとする心掛けがなく、理科指導を厄介視する傾向がある。実に敷かわしいことだと思う。何か師範教育に欠陥でもあるのではないのでしょうか。」と問うた所「それは僕も同感だ。師範の博物教育が正しく徹底しないから、生徒が興味を持たない結果だと思う。御影師範も僕が行くまでの博物が知識の注入に重きをおいていた。云々」と話されたことが今も記憶に残つている。教材園にも5、6回御出になり、その中2回は京大の小泉博士を案内してこられ、本園産の嘉宝西瓜を御2人とも大変喜んで召上がられて、先生は俳句「山の上に曇さをさけて桔梗見る北斗」を、小泉博士は「嘉宝西瓜ヲ賞味サセテイタマキシカバ雲南騰越産ノ油渣果ノ種子ガ支那ノ料理ニ最

上等トセルル、同科植物ナルヲ思出シテ

Yuchakua, Hodgoonia macrocarpa Cogu

小泉源一

とそれぞれ美事な絵入の筆跡を脚念画帳に残して下さつた。その時であつたか「学問の研究に従事するのは、校長なんかになるものでない。つまりぬ事に勢力や時間をとられ、落ちついて好きな研究や調査が出来ない。断りきれなくなつたものゝ云々」と語られたことを覚えて居る。又或晩餐会の席上で私の間に「年をとるとどうも刺戟が欲しくなるのか、酒を一寸飲んでみようかと思うことがあつたり、タバコも手にしてみたくなる時があつたりする。」と笑話をされた。又こんなことも思い出される。採集会途上教育界の人々の噂を先生としている時「年をとると人の名前を忘れて仕様がな。話に困るし、会つた時具合の悪い事がある。」と笑はれた。

今でも記念画帳や、自ら訂正して下さつた御著述などひもとく事があるが、その都度在りし日の先生の温顔が彷彿として、臉に浮び懐旧の情の切なるものがある。

## 山鳥吉五郎先生を偲ぶ

紅 谷 進 二

山鳥吉五郎先生は筆者の恩師である。又本県生物教育界の大恩人であり、大正初期に於ける文部省中等教員(現高等学校、中学校2級普)試験検定受検者の一大恩人である。直接、間接に後進者に与えられた指導面は実に大きい。晩年には俳句にも趣味を持たれ、俳句同人に自然界殊に生物現象面を科学的に紹介され概念的表現から写実的表現へ転向の多くの素材を与えられた。

明治38年東京高師を卒業され直ちに御影師範に赴任、神戸商大(当時神戸高商)の教養課程講師を兼ね、大正9年8月明石女師の教務主任に榮転される迄15年間該博な学問的根底に立つ明快な講義に手際のよい実験と講義を伴つた精緻巧妙な描面とを以て全生徒の期待と信頼に対えられ、周到な授業準備と合監としての業務に心労を費され乍らも常に専門的研究には深更迄精進され、その間本邦最初の中等教育終了者向の而も各綱に涉つて著者自らの実験観察図多数を以て埋めた参考動物学講義が完成したのである。吾々の年輩で生物殊に動物学を独習された方には記憶新なものがあるらと思うのであるが、飯島先生の犬著動物学提要出版前の恰好な唯一の参考書であつたのである。

不安の気の漲つた彼の日米開戦の直前昭和16年11月、兵庫県中等教育博物学会は当時会長であつた山鳥先生遺稿を御祝するためその機関誌第7号を記念号として特別編集により発行した。総クロス表紙、四六倍判、アード紙430頁の大冊子で最初に先生の写真肖像、学会主催の野外採集に於いて発見し牧野博士命名の(アリマウマノスズクサ)を美しい原色刷として掲げ、次に略歴と業績とを表示し、次に牧野富太郎先生、吉田貞雄先生、田中茂穂先生等特に御親交のあつた諸学者及び陸井初治、紅谷進二、安井喜太郎等先生の薫陶を受けた者数名の欽慕篇を挙げ、次に戦国各大学に於ける生物学、地質学関係教授各位並に中等教育界著名の博物科担任諸氏の祝賀寄稿論文60数篇を以て飾られ充実したその内容は先生が永年斯界の諸名士と共に我国生物教育のために活躍し貢献されたことを実証するに足るものである。

我国魚類学の泰斗元東大教授田中茂穂博士の山鳥氏編を同記念誌から拝借すると「山鳥君を一見して私の受けた印象は、君は頗る真面目で殆んど笑顔を見せない様に思われた。併し此観察の前節は誤りではないが、後節は見損いでは時に誤笑せられる。余り厭同性

に富んでないようであるが、実はそれが最もよい処で兎角融通の利く人は信頼が出来ない。私が初めて面会したのは山鳥君が御影師範に奉職していられた古い時代の事かと思つている。博物が好きであるのは郷里が丹波で幼時から自然に親しむ機会の多かつたためとは言え此時代に博物の好きな者が案外少かつたことを思うと、君は篤学の志に富んでいた事がわかる。事実の調査に熱心で理屈を列べるより先ず事実を重きを置くという性格が頗る貴い点である。それであつてこそ博物学の研究が出来るのである。よく色々と質問せられお蔭で私も色々の研究題目を思い付くことが出来た。努力家で骨惜しみをしないから植物の採集など大いに成績をあげることが出来たのである。世才に長けた人と思われぬが、親切心に富んでいるからその熱心に人を動かす力が強く、お世辭を言われぬのが却つて誠実の気が溢つていることを看取せられるのである。こういう人の老熟期には女学校の校長に極めて適任であろう。婦人はどうしても感情に趨り易い人が多いから斯様な落付いた人を上に頂いていると部下の職員は安心が出来ることであろう。近頃は俳句の楽しみを持つていられるそうである。之等もよい楽しみであつて高尚な世相を味う一面として羨しい限りである」と述べられている。

確か大正4-5年の先生の御影師範御在任中の頃だつたと思われるが、県下の各地から集つている生徒が夏の休に帰郷して1ヶ月余りの郷土生活をずる機会に各地の魚類を採集せしめられたことがある。田中博士との御親交の始まりはその頃であろうと思われる。私の丁度師範学校4年生時代博物同好の諸君とその魚類標本の整理を命ぜられ、兵庫県産淡水魚類をまとめられた。本県は地域広大にして変化に富み乍ら当時は尙その調査に乏しく開拓の余地多分にあり師範学校生徒程度の初歩の研究集積でも相当な価値のあるものが出来る時代であつた。此時代に生徒の休暇中における自発活動を基盤として自然研究の妙味を感得せしめること、協同研究の成果の必要であり尊いものであること、纏まりのついた時の喜び、こうしたものを実践を通して体験せしめられたことに吾々は深い感銘を持つものである。

明石女子師範学校在任5年余にして大正15年4月西宮市立高女校長に榮転された。西宮高女は当時市の前身西宮町立実科女学校の後をうけて間なく校舎と校地の不備は勿論、施設極めて整わなかつたのであるが職員組織の改善と内容の充実に努力されたようである。先生は直截簡明、実践躬行、真摯勤勉を旨とされ教育実践に科学的検討を加えられ科学教育を重視し生活の合理化を奨め所謂良妻賢母型の女子教育に隋せず自ら

生活を切り拓こうとする態度と能力の養成に努められたようである。職員も亦山鳥校長の方針に協力参加し教科教室研究室の施設運営に些の無駄も残さぬよう努め、そうかと云つて合理主義に惰することなく情操教育にも大いに意を用い音楽、茶道、俳句、和歌、弓道、写真、絵画等の倶楽部活動によりその目的達成の方途とされ父兄の信頼は実に深いものがあつた。筆者の3人の娘も此の学校に教育を受けたのであるが十分な女子中等普通教育をして頂けたと常々先生の御経営と職員各位の協力による実践に感謝している処である。

又本県生物教育及び本会の功勞者である元竜野高校教諭陸井初治氏が教え子としての山鳥先生綱を同記念号に次の様に述べておられる。陸井氏は高等小学校時代国史が好きで国史研究の目的で奈良師範に入学しようと考えていたのを、当時の担任教師が遇々御影師範の卒業生であつたゆゑ折に触れ山鳥先生の学究としての秀れておられることを話して聞かされた結果進学方向を変更して御影師範に入学することにしたと述べて居られる。そして「当時御影師範は募集定員の7-8倍の志願者があつて合格に非常なあやぶみをもつたが幸にして入学を許され、敬仰の山鳥先生の初めての博物の時間が待たれた。先生は想像とは違つてまだ若い実にやさしい先生でこの先生のどこが恐いのだろうか先輩の言葉を疑つた。「サクラ」の小枝を胴乱から取り出して生徒に1つ1つ配つて、先ず生徒自身に花の解剖をさせ実験帳に記載させてから、先生は花の縦斷圖を黒板に描きつゝ説明を始められた。材料を左手に持ちそれを見乍ら色チョークを使い分けて実に巧妙しかも速に描かれる。恰も浮彫の様に板上に浮き上つて行く。生物はこうして研究し観察し、こうして記載して行くものかと未だかつて経験したことのない視野が展開されて師範学校生徒となつた誇りと喜びと希望に胸の温まるのを感じた。第2時間目は「アブラナ」の学習であつたが、やはり材料が各自に配られて20分位自由研究をさせられ、その後先生の見事な図が板書される。実に見事に、説明を加え乍ら、描き乍ら遂次完成されて行く図はさながら活画を見ている様であつて実によく判る。胎座の説明があり、子房の横斷セクションの顯微鏡のデモンストレーションがある。微細な部分はこうして調べるのだナアと諒解した。当時師範学校は全生徒を寄宿舎に強制收容した。御影では舎監を寮長と呼んで寮生40名余を收容する1棟の端々に此寮長先生が家族と共に居住される住宅が附設されていたが此様な棟が4棟宛東西に2ブロック合計8棟あつた。山鳥先生は寮長として東ブロックの1つに住つて居られ寮生の面倒を見て居られた。誰いうとなく先生は何時寝られるのだろうか、よく身体が続くものだ。

一体何の研究だろう？「クモ」の研究だ「クモ」の標本をフランスへ送られたそうだと、と生徒間に色々な話題が取り上げられ、根気強く熱心に研究される様子が生徒に深い感動を与えずにはおこなかつた]

先生のお人柄の一面を生徒が「やさしい先生」、「恐ろしい先生」と表裏相反する表現をして、しかも怪しんでいない。動直で親切、笑顔も見える、やさしい慈父であつて而も学究の徒としては犯すことの出来ない權威が感ぜられる。教壇に立つた若い新卒の先生が省つて自己の貧弱さを知つて恩師の偉大な權威に対する長敬の表現をこうした幼い教え子に「恐ろしい」と云う言葉を使つたのであろう。

描画技術の巧拙によつて誰にでも望めぬことではあるが、講義の進展に伴つて次第に描図を完成させて行くことは理論の理解のために効果の著しいものである。既成の精緻な掛図の展示と共に教授者に望み度い事柄である。

先生御自身の不斷の研究生活そのものから与えられた感化と実事象に即しての自然研究指導を通して多くの生物研究者及び生物指導者を養成されたことは実に大きい功績であつて本県生物教育史上忘れてはならないと考える。

先生の研究業績は幾多の学界雑誌、教育雑誌に発表され後進者に与えた資料は枚挙に遑がない程であるが、今纏まつた著書丈を列挙してその業績を偲ぶことにし度い。

- 参考動物学講義
- 鉱物岩石学講義
- 六甲山の植物
- 随筆の植物
- 兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告
- 女子動物教科書
- 女子植物教科書
- 女子鉱物教科書

等であつて最初の参考動物学講義については既に述べた所であるが、次の鉱物岩石学講義は先生が明石女師へ御栄転の後に書かれたものであつて参考動物学講義の姉妹編とでも云う可き書物で、小学校鉱物岩石教材教授参考書であり当時文部省検定試験の理科受験者向き参考書となつたものである。結晶学的な見方、物理化学的実験法等を加えられたもので当時之又重要な参考書となつたものである。

六甲山の植物、随筆の植物は先生の西宮市立高女校長時代の著書で植物の一般向読みものとして味方可き記事が多い六甲山、阪神地方を中心としての植物誌を具体的に詳述され各所に先生の俳名北斗の作になる俳句が多く記されてある。

論説及び研究発表は之等の他、動物学雑誌、東京高等師範博物学会誌、兵庫県教育会発行の「兵庫教育」その他学術研究雑誌、俳句雑誌、新聞紙等に多くの発表がある。何れも學術的価値は勿論一般教養向として大衆の科學的思想啓蒙に貢献していることは申す迄もない。その御努力の偉大なことと発表数270篇余に上ることを思えば実に敬服の他はない。多くの著述家の際到我執のための苦しいものでなく銜学の厭味のないこと、乞われるまゝに筆を執られたに過ぎぬ点その風格を偲ぶに余りあるものと云わねばならぬ。

先生はその研究の内御自身の身につけられる以外の多くの客観的資料は常にその任地に留められる所で御影師範の標本室所蔵標本の数多くは先生御在任15年間の集積に負う所であつて、私は先生の明石女師へ御転任の後幾何もなく先生の御推せんにより母校の博物教室に勤務する様になり昭和14年転出する迄約15年半朝夕此貴重な採集物と生活を共にするの光榮に浴したのである。明石女師の約5年間にも相当残されたこと、思ふのであるが先生の最も長期に涉つて勤められた西宮高女は昭和20年空襲に会い全校舎全施設島内に歸し何一つ残つていないのは実に惜しい極みである。そして此大損失の衝擊と戦時中の過勞と終戦前後の國民的現象として殊に老人に見られた栄養障害、薬剤の不足等が原因して終戦の翌年昭和21年春卒然として逝去された。御行年程に66才御生前殊の他御世話になつた筆者今又先生御終焉の地西宮市の教育行政の一分野に職を奉かる実に感慨深きものあると同時に寂寥の感傷にふけることもある。今本県生物教育界の先輩諸氏の追慕篇を編纂されるに當り拙文を投じ以て先生の御冥福を御祈りし度いと念願するものである。

蜻蛉のやすむいとままなかりけり 北斗

は筆者が特に乞うて戴いた1句である。

(筆者 西宮市教育委員会 学校教育課長)

## 山鳥先生の思い出

山鳥先生の高名を始めて知つたのは実に古い事で大正の初めであつた。何でも先生の動物学講義の広告であつたと思う。その後山鳥先生の動物学講義1冊を精

## 川崎正悦

読して文檢にパスした人もあるなど云う話も聞いていたし、鉱物の本も書いて居られるし偉い先生だと思つていたのであるが親しく御本人に御目にかつたの

(以下24頁へ)

にも社会性がある。2個、3個、5個という様に常に共存し、之を Diagenesis 鉱物界の共生という。共生して1つの社界を形成する中にも鉱物に貴賤の別がある。賤なるは常に吾人の眼に触れるが貴なるは容易に眼に触れない。賤なるを見て貴なるを探索する。この事実は鉱物探査の秘訣であるが、人類探査に於ても同様である。これに反して不和にして決して共存共生しない元素や鉱物もあることは人類世界と同じである。かかる例は枚挙に遑を持たない。

私は教育界には直接の縁を持つて居らない。処が偶然のことで一教育者の人から「現今の教科書に2種あつて、其の一は複雑な現象より始めて順次に基礎的現象を理解せしめる様に仕組んだもの、其の二は基礎的現象から、順次に複雑な現象を理解する様に作られたるものであつて、何れも検定済であるが何れを採用するを可とすべきか」との質問を受けた。私は直ちに「後者を可とする」と判定した。何故ならば自然界の万物万象は凡ては簡より複に向うて居る。植物界、動物界其他発生したときは單に1葉2葉に過ぎぬが、發育するに従つて複雑となり葉、枝を増し、花を開き、遂に結実する。これが自然の理法であるのであ

る。又強大なるものは弱小なるものに勝つ。これは自然の理法である。然るに天然資源の賦存に於ても弱小なる日本が強大なる世男を相手に覇を争うなどは自然の理法を弁えざる矛盾であつて自然の法則に反して居る行いと云うべきである。自然の理法に従うを「自然」と言い、従わざるを「不自然」と呼ぶ。不自然を行つて自然を克伏せんとするは絶大なる努力を必要とし、而も目的を貫徹し得ないと思ふ。

自然に親しむ 此の一文が記念号に適した感想とも思わない。しかし生物学を専攻する人、地学を専攻する人、物理学化学を専攻する人、医学を専攻する人、趣味を有し、之を研鑽し人類文化の発展と高潮に功績する点に於て目的は同じである。分け登る麓の道は異れど同じ高嶺の月を見るのである。自然科学の研究は永遠にして平和、高遠にして無窮、世の繁華を避けて、悠久なる大自然を対象として静かに研究を楽しむ処に深遠なる妙味がある。逝きし人々も、生ける人達も同じ目的で研究に励み、宇宙の秘扉を開き行かれ又之を継承しつつあつて其の偉大さと崇高さを思い歡喜に堪えず拙稿を寄せた次第である。

(京大鉱産資源研究所長工博)

64頁より続く

は小坂の竹下英一先生のお宅であつたが其年月日もとんと覚えがなかつたが、これも八尾在勤中の事であるから大正の終りである(竹下先生は樟蔭女子専門学校の先生で大阪植物同好会幹事)初対面で山鳥先生は温厚謹厳な先生だと思つた。奇しき縁で後年先生に当校に(濶中)お世話にならうとは其時は夢想もしなかつた。それから間もなく私は秋田県の館代中学に転じ病氣して郷里八戸に静養していると昭和3年8月山鳥先生から飛電があつて当校に御世話になつたのである。

私が当地に来てからは魚崎と西宮で近くもあるし、牧野先生が当地に来られるとよく西宮女学校で膳業を作られたのでちよいちよい御邪魔をした。牧野先生御指導の採集会には山鳥先生とよく一緒にあつた。殊に印象に残っているのは瀨へ行つた時瀨の奥の旅館で河鹿を聞き乍ら一緒にビールを飲んだ事である。景色もよいし河鹿を聞きながら飲むビールは甘かつた。山鳥先生はテニスが好きであつた。学校へ訪ねて行くとよくコートで先生達とスマートな長身にラケットを手にした姿は誠によく似合い運動家らしい姿であつた。先生は俳句も好きで学校でも職員、生徒と共にやつて居られたので名士の短冊も沢山所蔵して居られた。始め

は野田前天楼先生の指導を受けて居られたが、後では横山曇楼先生が行つて居られた。それで先生の著六甲山の植物の中には北斗の号で多くの句が載せられている。先生は謹厳でありしやれなど云われなかつたが、蓮の花が開く時音がする、しないで一時やかましい問題が起つた折こんな狂歌様の歌を作つて見せられた。非常に面白いので早速短冊に認めて頂いている。それは

不忍の池に忍びて蓮の音を

聞きしに花は音なく咲く 北斗

と云うのである。山鳥先生は實に博學であり、勉強家であつた。語學はフランス語もやられたと云う事である。動物の方はクモ類を相当くわしくやつて居られたし、淡水魚も広く採集して居られた。動物や鉱物の本を書いて居られるのに最も我々が造詣が深いと思ふ植物の著書がなかつたが晩年に「隨筆の植物」、「六甲山の植物」を続け様に出されて、我々植物同好者を裨益して下さつた事は誠に有難い。昭和12年に兵庫県中等教育植物学会が創立されその会長として大いに活躍された事は大方諸賢の既に御承知の事である。あんな元氣な先生が昭和21年2月急逝された事は兵庫県生物学界の爲めに誠に痛惜に堪えない。